

# 月刊 ウィーン

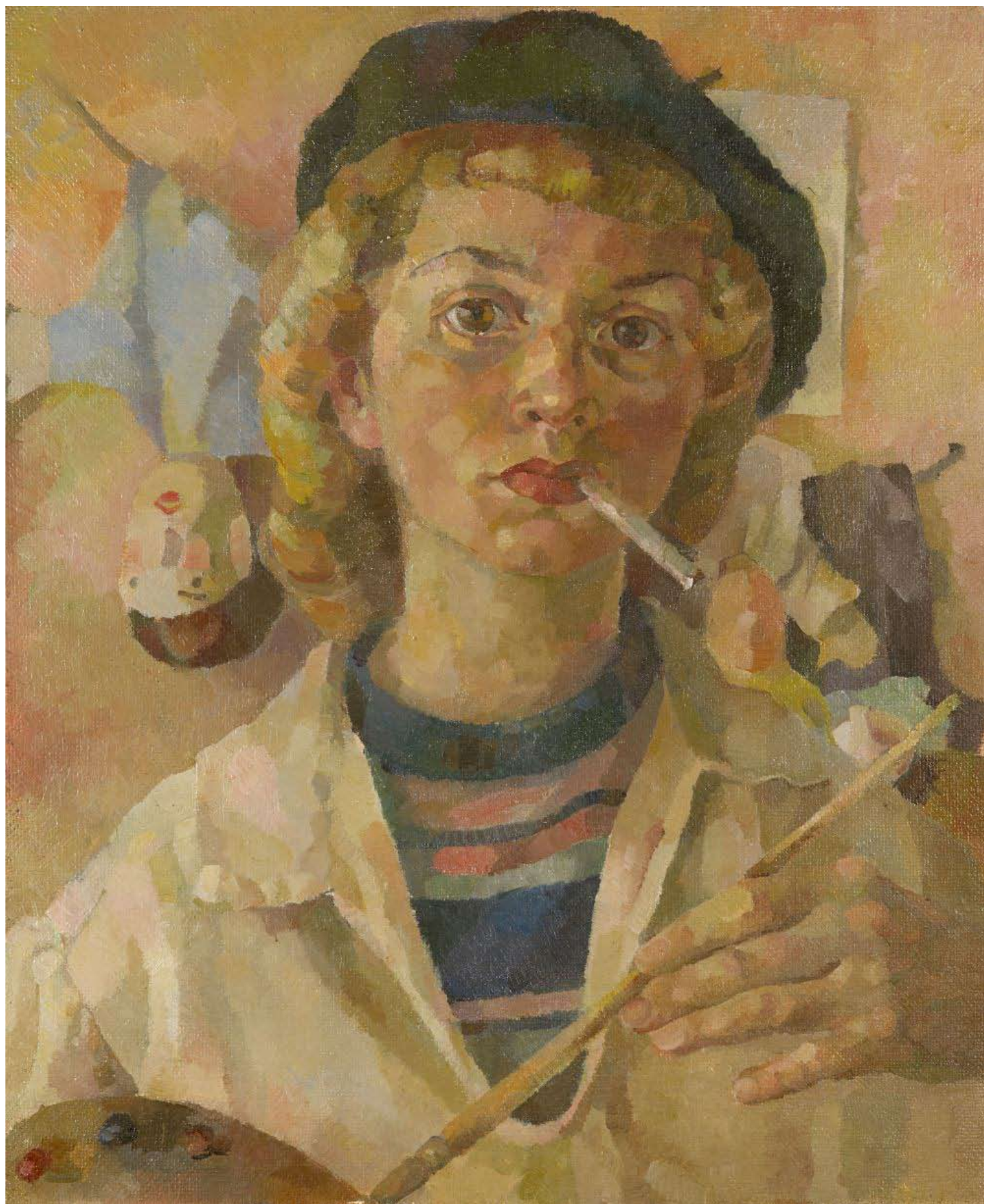
## GEKKAN-WIEN

Monatsmagazin Japanisch

現地オリジナル取材と編集で  
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年 創刊 34 年目 **Nr. 397**

**2023 年 2 月号**



Ruth Baumgarte Frühes Selbstbildnis, 1947 Öl auf Hartfaser © Kunststiftung Ruth Baumgarte



# 杉本純の原子力の話 II ウィーンと京都

130

政府の「GX（グリーン・トランスフォーメーション）実行会議」（議長＝岸田文雄首相）が二月二日に開かれ、「GX実現に向けた基本方針」を今後一〇年を見据えたロードマップ」を取りまとめた。二〇五〇年カーボンニュートラル」の目標達成に向け、エネルギー、全産業、経済社会の大変革を遂行すべく、「より検討を行ってきたもの」。

岸田首相は、八月に行われた同会議で、「再生可能エネルギーや原子力はGXを進める上で不可欠な脱炭素エネルギー」との考えのもと、あらゆる方策について年末までに具体的結論を出せるよう検討の加速化を指示していた。

今回決定された基本方針の中で、原子力については、「エネルギー安全保障に寄与し脱炭素効果の高い電源」とされ、最大限活用することを明記。「二〇三〇年度電源構成に占める原子力比率二〇〜三〇%の確実な達成」に向け、安全最優先で再稼働を進める。次世代革新炉の開発・建設については、廃止を決定した炉の建て替えを対象に具体化を進めていき、その他については、今後の状況を踏まえて検討していくとしている。

運動期間の延長については、従来の「四〇年十二〇年」の原則を維持した上で、「一定の停止期間（新規制基準への対応など）に限り追加的な延長を認める」とされた。

原子力政策の関連で、岸田首相は、高レベル放射性廃棄物の処分地選定に関して、「文献調査の実施地域の拡大を目指す」と発言。翌三日には最終処分関係協議が開催され、同会議議長の松野博一官房長官は、関係関係が連携し具体的な対応方針を取りまとめるよう指示した。

西村康稔経済産業相は、二二日の「GX実行会議」終了後、臨時記者会見を行い、「国民から幅広く意見を求め、丁寧な説明に継続して取り組んでいく」と述べ、パブリックコメントを早急に実施し、GX実現に向けた関連法案を年明けの通常国会に提出することを明言した。

今回の基本方針決定を受け、電気事業連合会の池田和弘会長はコメントを発表。「再生可能エネルギーや安全を大前提とした原子力発電の最大限活用、火力発電の脱炭素化、電化の推進など、安定供給確保とカーボンニュートラルの実現に向け、あらゆる対策を講じていく」としている。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市に関する偉大な遺伝学者（その二）を紹介したい。エーリヒ・フォン・チエルマクは、一八七一年にウィーンに生まれた。父親はチエルマク閃石の由来となった鉱物学者のグスタフ・チエルマクであり、母方の祖父は、ウィーン大学に留学していた学生時代のグレゴール・ヨハン・メンデルに植物学を教えたウィーン大学教授の植物学者のエドゥアルト・フェンツルである。チエルマクはウィーン大学で農学を学び、実用的な農業経験を積むために農園で働き、初期は園芸品種の改良に関心を示した。九六年には、ドイツのハレ・ビッテンベルク大学から博士号を取得した。九八年、オーストリアの国営農場でエンドウを使って植物の栽培実験を始め、一九〇〇年までに自身の植物の実験から遺伝のメンデルの法則を独立に導き出した。チエルマクは、まだ若かったため、自分の書き上げた論文が受理される心配だったが、彼は論文の公開を何とか急がせることができた。こうして、チエルマクは、オランダのユーゴード・フリース、ドイツのカール・エーリヒ・コレンスと並び、メンデルの法則を独立に再発見した三人の一人として学芸で認められた。元々チエルマクは植物の育種家で、彼の雑種の実験は遺伝の法則を利用して作物を改良するアイデアのもとに行われた。チエルマクは研究のほとんどを自分自身で行い、小麦、大麦、カラス麦のような食用作物の収穫量が増えるように改良した。〇三年に、チエルマクはウィーン農芸科学大学の准教授に任命され、〇六年に正教授となった。チエルマクはオーストリアの農業と植物の育種に大きな影響を与えた。



「GX 実行会議に臨む岸田首相（官邸ホームページより引用）」  
https://www.jaif.or.jp/journal/japan/16021.html

理学を専攻。北海道帝国大学農学部を卒業後大学院へ進学。二〇年、京都帝国大学理学部植物学教室助手、二四年には助教となる。二五年にはメンデルの法則の再発見で有名なコレンス（カイザー・ウィルヘルム生物学研究所）のもとに二年間留学。二七年には農学部農林生物学科に新設された実験遺伝学講座の教授として、約三〇年間牽引した。中立進化説で有名な木村資生教授は木原研の出身。その後、国立遺伝研究所所長を二四年間務めた。ゲノム分析という染色体分析法を三〇年に確立し、この方法を用いて、パンコムギの祖先種を発見。木原教授は日本の遺伝学分野の発展に大きく貢献し、三〇〜五〇年代頃、海外で最もよく知られていた日本の遺伝学者だった。木原教授の活動範囲は広く、その研究も研究室にとどまらない。この時代は海外渡航が容易ではない時期だったが、植物調査のための海外探検に五回（内蒙古、カラコルム・ヒンズークシ、シッキム・アッサム、コーカサス、南米スリナム）出かけている。六〇〜六三年には原子力委員を務めた。学術界以外でもさまざまな顔を持ち、例えば、冬期五輪の日本選手団団長を二回務めている。日本スキー界草創期の発展に尽くし、科学的トレーニングを提唱し、スキー、テニス、野球などをたしなんだ。最初の著作のタイトルは「最新スキー術」（共著）。四八年に文化勲章を受章した。木原教授が遺した言葉として「地球の歴史は地層に、生物の歴史は染色体に記されている」が知られている。

一方、一八九三年に東京市に生まれた木原均（ひとし）教授は、麻布中学校を卒業後、東北帝国大学農科大学（現：北海道大学）予科に入学。農学科第三部に進学し植物学



余談であるが、チエルマクはメンデルの法則に関連して最近初めて知った。木原教授の著作は読んでいないが、スキー、テニス、野球は筆者も少々たしなんだ。今月も両市に関連する偉大な遺伝学者を紹介することができた幸運に感謝しつつ、チエルマクの写真を掲載させていただきます。

参考：「ゲノム」研究開始 木原均とパンコムギの祖先探し、飯田香穂里、生物の科学 遺伝、Vol.73, No.6 52-56 (2019).

■ 杉本純 元京都大学教授

元原子力機構ウィーン事務所長



1971年発行オーストリア郵便記念切手



ウィーン19区にある墓



ウィーン20区にある記念碑



Austria-Forum © Privat



© Österreichische Akademie der Wissenschaften